インフィニットストラトス invisibility menaces 見えざる脅威

jun

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニティストラトス invisibility
menaces 見えざる脅威

【Nコード】

N4188Y

【作者名】

jun

【あらすじ】

篠ノ乃博士が開発したISによって世界のパワーバランスは大きく崩れ、女尊男卑が社会の風潮となってしまった。しかし、織斑千冬の弟一夏はなぜかISを動かしてしまい、学園に入学することになった。しかし、また別の男がISを動かしてしまい!?

プロローグ（前書き）

何分初心者なのでご容赦ください。でも精一杯書かせていただきます！！

プロローグ

「はあっはあっしつこいなあもう!~!」

少年は地上500メートルを飛行していた。

そう、ISで。

.....
.....
.....

SIDE 一夏

(なんでこうなった・・・)

その頃、織斑一夏は学校生活初日のHRの真っ最中だった。

その日の放課後、一夏は幼馴染の篠ノ乃箒と共に稽古をしていた。
もちろん一夏のボロ負けで。

その砂塵の中から一つの影が見えた。

15分前

「くそっ、どこかに建物は!？」

謎のISの集団に追われた少年はもう何時間も飛行をしていた。

「このガキイ!!いい加減にあきらめろっの!!!!!!」

「いやだっの!!ん?あれは…」

少年は一つの巨大な建物を発見した。

「しめたっ。IS学園だ!!よし、これで助かる!!」

少年は一気に急降下し、学園に張り巡らされたシールドにとりついた。

「後はこのシールドを…」

「おちろオオーーーーー!!!!!!」

「やっべっつっ!!」

女の振りかざした一撃は少年のISの右肩を打ち抜き、そのままシールドを破壊した。

後ピットにある非常ボタンを押して！すぐに先生達がくるわ！！」

「え、そんな簡単に信じちまってるのか？」

「アンタねえ、ISのコアナンバーを教えるのは、自分の個人情報をすべて教えてるの同じなの！！そんなことまでして、援護を頼むなんて、よほどの事態よ！」

「そ、そうか・・・」

「分かったなら早く行きなさい！こっちも出撃するわ！！」

「わかった！」

一夏はピットの非常ボタンを押して、損傷しているISに近づいた。

「援護感謝する。こちらの機体は中破されている。とにかく時間を稼いでくれ！」

「ああ。って、まさか男？」

「そんなことは今はどうでもいい！！」

「わ、わりい。でも時間稼ぎってたってどうすりゃいいんだ？」

「あそこのISと同じように、牽制攻撃を続けてくれればいい。」

ふと向こう側を見ると鈴が複数のISを同時に相手をしていた。

「助けるとは言ったものの、くそっこいつらしつこい!!」

するとバイザーをしたISから下品な声が聞こえてきた。

「邪魔すんじゃないよこのアマアアアアアア!!」

鈴のISに攻撃が加えられようとしたとき、

「鈴——————!!」

ガッキイイイイイイイイイイン!!

一夏の白式が鈴と敵の間に割り込んできた。

「鈴!!大丈夫か!？」

「何ぐずぐずしてたのよ!?あぶなかつたじゃない!!」

「ごめん・・・」

すると、後方から打鉄やラファール・リヴァイブに乗った教員達が続々と来た。

「やった!!先生たちが来たのよ!!」

「た、助かった・・・」

「あれが学園のISか・・・すごい数だな・・・」

三人が安堵の息を漏らしていると、一機のISがスタングレネードを投擲した。

ズバアアアアアン!!!!!!

「さすがに数が違う。ここはひとまず撤退するぞ!」

そういつて三機の謎のISはシールドを容易に破壊してあっという間に飛び去った。

「とりあえず一安心か・・・」

そういつて少年はISを強制解除し、意識を手放し、その場に倒れこんだ。

プロローグ（後書き）

一応週一ペースで書かせて頂きます。アドバイスや不具合がありましたらじゃんじゃんコメントください！！

第一話 転入決定（前書き）

あんまり慣れてないので短文になりがちかもしれませんがご容赦ください・・・

第一話 転入決定

その少年はベッドの上で目覚めた。

「う・・・うん？」

そこはいかにも医務室という感じで、自分が怪我人ということを感じさせられた。

「ここはどこだ？ 確かIS学園のアリーナで気絶して・・・そうなるここは学園のどこかか？」

プシュッ

するとタイミングを見計らった様に医務室の近未来的なドアが開き、二人の女性が入ってきた。

「目が覚めたようだな。安心しろ、私はここの教師の織斑千冬だ。こっちは同僚の山田先生だ。」

織斑千冬という女性は、隣の服と体はアンバランスな小柄の女性を紹介した。

「初めまして、山田真耶です。よろしくお願ひしますね。」

「さて、こちらの自己紹介も済んだので、そちらのことも教えて貰

おうか。」

少年は一息ついてこういった。

「えっと、俺の名前は井上太智です。生年月日は2月14日、年齢は15です。一応所属は日本政府内閣直属特務IS研究機関京都支部。」

「The Government Cabinet Immediate Special Is Research Facilities Kyoto」
通称TISK（タスク）の実験協力者です。」

「その年齢でなぜそのような研究機関にいたのだ？」

「俺の両親はそこの所長と副所長でした。ですから手伝いみたいな感じで、実験に参加していました。」

「実験とは？」

その時、太智が衝撃的な一言を言った。

「決まっているでしょう？男がISに乗るための実験です。」

「つつつ！！」

「詳しく言うと、脳内のホルモン分泌率や、それ自体を入れ替えた
り、はたまた遺伝子構造と染色体を弄くり回す様なことです。まあ
大っぴらに言えるようなことではないとわかってますよ。おまけに
過度のストレスや薬品の副作用なんかで自慢の黒髪は銀髪に、茶色
かった瞳はグレー、立派な黄色人種な肌色は真っ白のもやしヤロー
になっちゃって。それに俺の体は、遺伝子的に約41.653%が
女性の体なんです。性行為をしても子供が出来る確率なんて10万
分の1以下ですよ。全く、何ラウンドすればいいんだつつーの。」
なおも千冬は続けた。

「なぜそのような実験に参加した？」

「自衛のためです。」

「自衛？」

「さっきも言ったタスクというのは公式的ではないですが、日本、
いや世界でも5本の指に入る研究機関でしょ。そこの所長と副所
長の息子であれば、大概の人間は人質にとって技術を盗もうとする
はずですよ。ですからいつ何時襲われるかわからないので、自衛のた
めにISにのる実験をしていたのです。まあ理由はそれだけではな
いんですけどね。」

「ほかの理由とは？」

「この女尊男卑の世界を変え、元の何の差別もない社会に戻すためです。俺らタスクはそのために日夜研究をしていました。ですが・
」

「ん？」

「ですがある日、変な奴らに襲われてしまい、おれらタスクの施設は壊滅、そのまま組織もバラバラになり、世界中に散らばって今も研究を細々と続けていますよ。」

「その話、もう少し詳しく聞かせてくれないか？」

「ええ、初めに襲われたのは俺の中学の卒業式の日でした。式が終わって、皆で写真を撮り合ったり、この後の打ち上げについて騒いでいた中、いきなり俺の父が撃たれました。犯人は誰かわかりません。恐らく狙撃されたんだと思います。撃たれた後、母が俺と一緒に車に乗って施設まで行きました。車を降りた瞬間車が爆発して、母は俺を爆風からかばって死に、そのあとは研究員の人に連れられていきついた先は、極秘裏に開発された俺のISだったんです。死にも狂いで俺はISに乗り込みました。その間に何人も研究員の人を殺され、俺はそれをぐっと堪えながら機体を起動させるのに集中しました。やっとのことで起動した瞬間、俺は天井にいくつも穴をあけてフラつきながら上空へ飛びました。見てみると施設は無惨にも跡形もなく破壊され尽くし、大量の死体が転がっていました。そのあとは1ヶ月半ほどこそ逃げ回って今に至るわけです。」

そのような事件があっただにもかかわらず、大きなニュースにならない

かったのは、大方、その研究機関の研究内容を知られないためだったのだろう。千冬はそう理解した。

「以上が俺の経歴です。それで、俺の処分はいつたいどうなるのですか？織斑さん？」

その瞬間・・・

バキッ！！

太智の頭がいきなり殴られた。

「なにすんですか!？」

「「織斑先生」だ。馬鹿者。生徒がそんな生意気な口をきくな。」

「へ・・・?」「生徒」?どういうことです?」

「どうもこうもあるか。こんな危険人物、放っておくわけにもいかんだろう。それにお前がその辺を飛び回っていたら一般市民が巻き添えをくらう恐れがある。後、お前はまだ15だろう?私たち教師が教育する必要がある。素人にISを乗られてはたまらんからな。」

それを聞いて太智は、新しいおもちゃをもらった子供のような笑顔を見せた。

「ありがとうございます!!!」

するといつの間にか電話を手に持っていた山田がこう言った。

「・・・はい。はい、わかりました。では早速井上君。あなたのクラスは2組になりました。今日のところはここでしっかりと傷を癒してください。調べてみたら体中傷だらけでしたからね。」

「それと井上、これを。お前が身に着けていた待機状態のISだ。」

そう言つて千冬が差し出したのは、シルバーのネックレスだった。つり下がっているシルバープレートには、

C L E A V E

と刻まれていた。

「お前のISはC R E A V E（クリーヴ）と言つのだな。日本語で「切り開く」。いい名前じゃないか。」

「はい。」

「では明日からお前はここの生徒だ。早朝にまた起こしに行くから、それまではゆっくり休んでろ。」

そうして千冬は山田とともに部屋を後にした。

第一話 転入決定（後書き）

次回は第二話と登場人物紹介を書きたいと思います。

第二話 転校生はもやしっ子（前書き）

一応オリキャラは二組に入れて鈴との絡みを増やそうかと思っています。

原作での扱いが・・・

第二話 転校生はもやしっ子

キーンコーンカーンコーン

近未来的な校舎に不釣り合いなチャイムが鳴り響く中、一年二組のHRが始まる。

「早く席についてください。あ、それと今日は転校生を紹介します。」

「ええー！ー！ー！ー！！？？？」

「だれだれ？」

「どんな子だろう？」

皆それぞれ感嘆の声を上げる中、鈴は昨日のことを思い出していた。

(結局、あのISに乗ったのは誰だったんだろう？顔まで隠れたISだなんて珍しいわね。でも声が完全に男のこえだったし。戦闘が終わってからいきなり倒れて先生たちに運ばれて行って全然近づけなかったし・・・あゝもうっ！イライラするわね！ていうか、転校生って昨日の奴かしら？)

「キャ・・・」

「んお？」

「キャー――――ツツツ――！！！！」

その瞬間、雲を貫くような声がクラス中に響いた。

「すごい！！うちにも転校生が来るなんて！！」

「美形！それでいて少し草食系男子！」

「お持ち帰りしたい！！」

「左利きだつて、すごい！超レアだよねっ！しかも京都出身！！」

「男の子なのにウインドウショッピングが好きだなんて、なんかオシャレじゃない！？素敵！！制服のアレンジもなんかカッコいいしっ！！」

「おお・・・何か知らんが成功したっぽいな・・・よし、高校デビューは無事に出来たな。」

太智がホッと胸を撫で下ろしている間に一組の方では・・・

.....

「何か二組の方が騒がしいですね。」

「うるさいな・・・もう少し静かに出来んのか隣のやつらは」

「席替えでもしてんのか？」

などとぼやいていると、

「そこっ！！私語を慎めっ！！」

バシンバシンバシンッ！！！！

見事出席簿の3連コンボが決まった。

「うう、痛いですわ・・・」

「ぐぐぐぐ」

「千冬姉・・・ちょっとは手加減しろよ・・・」

「織斑先生だ。」

バシンッ！！

「全く、隣のクラスがうるさいくらいでいちいち喋るな!!」

「すみません・・・」

因みに一夏は今日で出席簿アタックは3回目である。

.....

視点は戻って二組に。

「それじゃあホームルームはここまで。各自次の授業の準備を
して頂戴。」

担任がそういって教室から出た瞬間・・・

「ねえねえ、井上君はウインドウショッピングが好きって言った
けど、どこのブランドが好き？」

案の定女子たちが一斉に質問攻めにきた。

(やっぱり来たか・・・)

「ええっと、いつも行くのはライオンとかで、はっきりこれとい
って好きなブランドはなくて、気に入ったお店ならどこだって好き
だよ。」

「へえ〜、型にはまらない感じなんだね。」

「まあね・・・あはは・・・」

「型にはまらない自由なペースが好き・・・と。」

（なんか向こうでメモってるし・・・）

「じゃあさじゃあさ、今度皆で買い物に行かない？井上君の私服も見たいし。あ、そうだ。井上君はどんなスタイルが好きなの？」

「そうだねえ、俺は結構ナチュラル系とか、清楚系にゆるい感じの服も好きだな。」

「ナチュラルに、清楚に、ゆるふわ系・・・」

（またメモってる・・・）

「あ、でもあんまり大人数は嫌だな。せめて3、4人ぐらいじゃないと・・・」

「あ、結構少数派なんだあ。でもそれっぽいねえ。ひよつとして、静かなとことか好き？」

「うん。景色がきれいで静かな場所は大好きだよ。」

「じゃあ湖とか、そういうところにも行く計画もしとかなきゃだねっ
！」

「そうだね、あはは・・・」

キンコーンカーンコーン

慣れない愛想笑いをしているとまた不釣り合いなチャイムが鳴った。

「あ〜ん、もっとお話したかったのに〜。」

「じゃあ井上君、また後でね〜」

「う、うん。また。」

ぞろぞろとクモの子を散らすようにして女子たちが席に着く。

(助かった・・・あ、名前聞くの忘れてた。)

.....

「で、あるからして。」

授業中に太智はふと、鈴の方を見た。

(あの子、確か学園に逃げてきた時に援護してくれた子だったよな。確か、鳳鈴音とかいう・・・後で話しかけてみよう。)

「・・・君！井上君！！」

「は、はい！」

「ちょっと、聞いてた？問の12番、答えは？」

「ええっと、イです。」

「はい正解。なんだ、ちゃんと聞いてたのね、それならいいんだけど。」

「すごい。即答だよ、即答。」

（ああ、ビビった・・・）

なぜ太智が即答できたかというと、太智は研究所での実験のために毎日ISについて勉強をしていたからだ。その学力は男子といえど学園の生徒となんら遜色ないだろう。一組の生徒は例外として。

「ヘックシヨイ！！・・・誰か噂してんのか？なんちゃって。」

「織斑！！！」

「はいい！すいません！！！」

「クスクス・・・クスクス・・・」

（うう、死ぬほど恥ずかしい。）

そんなこんなで午前中の授業は過ぎて行った。

第二話 転校生はもやしっ子（後書き）

太智の服装はザフト軍の白服をイメージしています。
後オリキャラの紹介も同時にアップします。

オリキャラ紹介(前書き)

やっとキャラのイメージが固まりました・・・
因みに声的には神谷浩史をイメージしてます。

オリキャラ紹介

井上 太智^{たいち}

生年月日 2月14日

血液型 A型

身長 168.5cm

体重 51.2kg

瞳の色 グレー 髪の色 銀髪でほんの少しくせ毛

趣味

一人で読書をする事 オシャレ ウインドウショッピング 軽い運動

所属 日本政府内閣直属特務IS研究機関京都支部

The Government Cabinet Immedia
te Special IS Research Faciliti
es Kyoto

通称^{タスケ} TISK

研究所の所長と副所長の一人息子で、中学の卒業式の日に関親を

正体不明の組織に殺される。また、同一の組織に追われ続け、やつとの思いでIS学園にたどり着いた。織斑千冬のはからいで二組の生徒になった。度重なる実験と薬物投与により髪と瞳が変色して銀髪とグレーになった。さらに肌も白くなったので中学の同級生からは「ヘタレもやし」と呼ばれていた。ISの操縦に関しては、回避運動だけは得意らしく、本人も自信があるらしい。また、料理に関しては極々人並みにでき、味の評価から「ミスター普通」と揶揄されたことも。本人はかなり気にしている。ファッションセンスは定評があるらしく、中学時代は友達によく服の買い物には付き合わされたらしい。人気の某ファッション雑誌も定期購読している。制服は上着を長いトレンチコート風に改造し、ブーツは黒色を使用している。因みに得意科目は数学。

オリキャラ紹介（後書き）

次回は少し更新が遅くなるかもしれませんが。
なるべく短文にならないよう頑張ります！！

第三話 挑戦状（前書き）

今回は頑張って文を長くしました!!
今後も徐々に量を増やしていきたいと思えます。

第三話 挑戦状

太智が転校してきた日の昼休みの二組にて

「ねえ、確か鳳さんだったよね？ちょっと話をしない？」

太智は女子の群れをかき分けながら鈴に話しかけた。

「ん。別にいいわよ。でもこれから一夏のところ、いや一組に行くから。そうだ、アンタも来る？ちよつどいい機会だから皆に紹介するわよ。」

「ほんと？じゃあそうするよ。」

太智は鈴の後について歩き出した。

「あー！ー！ーっ！鳳さんが井上君をつれてった！」

「え？どつう関係なの？」

「いや、別になんでもないから・・・ごめん皆、また今度一緒にお昼をたべよう。」

「まあ井上君がそつうなら仕方ないか。またね。」

こつうして太智は鈴とともに二組を出た。

「やつほー、一夏。これからいつしよにお昼食べない？」

「よう鈴、ちょうどいいタイミングに来たな。俺たちもこれから学食に行こうと思ってたんだ。ん？後ろにいるのは誰だ？」

「それは食堂に着いてから話すわ。さ、行きましょ。」

「おう、おーい篤、セシリア、学食行こうぜ。」

「ああ。ていうか、私たちが最初にさそったんだろう！」

「そうですねー夏さん！わたくしたちが最初にさそった直後に鈴さんたちが来たのですわ！」

「悪い悪い。まあそんな細かいことは気にすんなよ。さ、行こうぜ。」

「むづ。」

「不服ですわ・・・」

.....

学食にて

「さて、みんな気になってるとは思っけど、今日うちのクラスに転校してきた井上太智よ。さ、あんたも自分で自己紹介なさい。」

「うん。えっと井上太智です。呼び方は自由にどうぞ。生年月日は.....」

「以上です。」

「長い。」

鈴がブツサリと太智の自己紹介を全否定した。

「し、ごめん・・・」

「まあいいわ。そういえばあたしもちゃんとした自己紹介あんたにしてなかったわね。中国の代表候補性、凰鈴音よ。鈴でいいわ。改めてよろしくね。」

「じゃあ次は俺だな。一組の織斑一夏だ。一夏でいいぜ。名字で分かると思うけどあの織斑千冬とは姉弟だ。よろしくな。」

「同じく一組の篠ノ乃箒だ。箒でいい。よろしく。」

「イギリス代表候補性のセシリア・オルコットですわ。呼び方はセシリアで結構、一夏さんと同じ一組ですわ。以後お見知りおきを。」

「あはは、なんだかみんな楽しそうな人だなあ。まあよろしくな。」

「さつてと、自己紹介も終わりにして、さつさとお昼食べちゃいましょ。もちろんあたしはラーメン。」

「またそれが。俺は日替わりランチだな。箒とセシリアは？」

「私は焼き魚定食だ。」

「わたくしはパスタですわ。」

「太智は？」

「え？俺はそうだなあ・・・うん・・・」

「さつさと決めなさいよっ！！後ろがつかえてんでしょっが！」

「うわあ！ごっ、ごめん・・・初めてだから勝手がわからなくて・・・じゃあ、カツ丼で。」

「初めからそうしなさいよ。ったく・・・」

二分後、全員注文の品を受け取り、やっとのことで席を見つけた頃。

「おっ、やっと席が見つかった。みんな、座ろうぜ。」

「ふう、やっと見つかりましたわ。」

「ちょっと出遅れたのがひびいたわね。」

ぞろぞろと各自イスに座り、太智も腰を下ろしたとき、

「井上君、隣いいかな？」

そう言ったのは二組の女子たちだった。

「うん、いいよ。」

(ええっと、手前から明るい感じの子が荒木さんで、スポーツの出来そうな子が松下さん、奥の小さい子が橋本さんだったかな?)

そう言つと後ろの二人の女子が小さくガッツポーズをした。

「やった！ありがとうっ！」

こうして一夏たち五人と太智と一夏目当ての(主に太智狙い。同じクラスだから。)女子三人組の昼食会が始まった。

「そういえば鈴は中国出身らしいけど、もしかして中華料理とかって作れたりする？」

「うん、一通りはできるわよ。」

「あ、それ俺も気になってた。鈴、あれから上達したのか？」

「ふふん・・・あの時とは比べものにならないくらい上手くなってるわよ。」

「へえ、そいつは楽しみだな。近いうち食わせてくれよ。」

「う、うん」

その時鈴の顔が一瞬だけ赤く蒸気したのを一夏と太智は思い切り見逃した。

「ねえ、俺も鈴の料理を食べたいな。いいかな？」

「もちろんいいわよ。」

クイクイ

すると太智の制服の裾が引っ張られた。

「もー井上君、せっかく一緒に食べてるんだからお話でもしようよ。」

「う、うん。そうだね。」

太智はさりげなく一夏や箒たちにヘルプの視線を送った。しかし箒たちはさらっと見て見ぬフリをし、一夏は温かい眼差しを送ってきた。

(俺もこの前同じような状況になったからなあ・・・)

一夏は遠い目をしてしみじみと思った。

「そういえば井上君って好きな子とかいるの?」

グフツ　　危うく吹き出しそうになる太智。

「い、いないよ。」

「へえ、じゃあ好きなタイプとかは?」

「うん、わかりやすく言うと、高飛車なお姫様みたいな子がいいな。なんかそばで支えてあげたいっていうか。そうだなあ、例えばそこにいるセシリアとか鈴結構タイプだよ。」

ブッフオオオオオオオ!!!　　セシリアと鈴は盛大に水を吹き出した。

「ゲホツゴホツ・・・い、いきなり何を言うのよアンタはっ!」

「ゴホツ、そ、そうですね!!時と場所を考えてくださいまし!」

「井上君・・・さり気に大胆なことを言うのね・・・」

「そうかな?下手にごまかすよりはマシかなって思うんだよね。」

「ふうん、井上君は尽くすタイプなんだね。じゃあ私たちはどう思う？」

「とっても素敵だと思うよ。下手をしたら惚れちゃいそうかもね。」

「もうっ井上君ってばお世辞が上手だね！」

「気に入ってもらえたようで何よりだよ。」

すると隣の鈴に思い切り脇腹をつねられた。

「いててて！何すんのさ鈴！」

「アンタさつきもセシリアが言ったように時と場所を考えてって言うてんのよー！」

「そうかな？」

「そうよー！」

その時ちょうどタイミングを見計らったかのように予冷のベルが鳴った。

「お、もう昼休みが終わったのか。皆、早く戻ろっぜ。」

「井上君、早く戻ろっよ。」

「うん、ちょっと待って。」

そう言つて一夏をきつかけに一行は学食を後にした。

「なあ太智。」

「ん？なに一夏？」

「デリカシーがないと女子に嫌われるぞ。」

（お前が言つな。）

篝と鈴とセシリアは同時に心の中でツッコんだ。

.....

数十分後 学園のグラウンドにて

「今日の午後の授業では一組と二組合同のISの実習訓練をする！
！全員ISスーツをちゃんと着ているようだな。ん？なんだ、井上。」

「あのお、俺のISスーツはまだ届いてないんでしょうか？」

「ああ、その件なら、ほね。この前お前が着ていたISスーツを修

理したやつだ。今から五分だけ時間をやる。さつさと着替えてこい。」

「はいつ。」

太智はスーツを受け取ると猛ダッシュで更衣室へ向かって走り出した。因みに一秒でも遅ければ千冬の出席簿が火を噴くので必死になるのも無理はない。

「では先に織斑、オルコット、凰、ISを展開し、上空へ飛翔しそのまま待機しろ。」

「「「はい。」」」

鈴とセシリアは即座にISを展開させた。

「どうした織斑、さつさとISを展開させる。他の奴は一秒もしないうちに展開し終わってるぞ。」

「ちょっと待ってください。もう少し・・・」

右手のガントレットを左手で握り、意識を集中させる。

(来いっ！白式！)

スーツと一夏を光が包み、次の瞬間にはISをまとった姿になっていた。

「よし、三人ともさつき言った通りにしろ。」

「「「はい。」」」

三機のISは上空200メートル程まで上昇し、そこでピタリと止まった。

「よし、そろそろあいつも来る頃だな。」

千冬がグラウンドの端を見やると、全身真っ黒のISスーツを身に纏った太智が走ってきた。

「はあ、はあ、すみません遅くなっちゃって。」

「いや、時間内に来たので謝る必要はない。では井上、ISを展開させる。」

「分かりました！」

「え？井上君って専用機持ちだったの？」

「代表候補性でもないのに専用機持ちだなんて、織斑君と一緒にだね。ていうかあのISスーツすごく暑そう・・・」

「ああ、これはね、プラグモデルって言って、オーダーメイドで作ってもらったんだよ。」

太智のISスーツはプラグモデルと言い、一夏のそれと比べると肌の露出部分が一切ない。顔以外はすべて黒のスーツで覆い尽くされ、ところどころに精密機器部分と思わしき銀の金属部分が顔をのぞかせている。そして太智は一夏と違い、無理やりISに乗るかたちなので、ISスーツも大きくより機械化している。

「いつまで喋っている！さっさとやれ！」

「はいっ！」

そういつと太智はネックレスのプレートに軽く触れて瞬時にISを展開させた。

「ほう、意外に展開時間が早いな。」

「ありがとうございます。」

(ここに来る前は伊達に変な奴らから逃げ回ってきたわけじゃないしな。一番ひどかった時は用を足してる時に襲ってきたからなあ・
・早着替えは俺の特技なんだよな。)

『CREAVEの起動を確認、以下のOSを同時に起動させます。』

無機質な女性の声の流れてくる。太智はこの声に何故かなんとなくむず痒くなってしまう。

(この声を聞くとなんかわくわくするんだよな・・やっぱ少年はメカが好きってか。)

『General

Unilateral

Neuro-Link

Dispersive

Autonomic

Maneuver

の起動を確認、以後の操作権限をパイロットに譲渡します。』

全身装甲フルスキンの機体が現れる。しかし・

「なんだか、地味な色だね・・・」

「うん、ちょっとがっかりかも。」

「まあ見てなよ。面白いことになるから。」

(フェイズシフト装甲機動・・・)

意識を集中させると、機械特有の駆動音とともに全身の装甲が色づいていく。

シユアアアン・・・

そこにはさつきまでの地味なモノトーンカラーではなく、緑と白を基調としたISに変わった。

「わあ、すごい！きれーだね！」

「はは、ありがとう。織斑先生、次の指示を。」

「うむ、では織斑たちのところまで上昇、そこまで来たら次の指示を出す。」

「了解。」

そういつと太智は機体を急上昇させ、一夏たちのもとまで近づいた。

「太智のISって・・・あ！お前ってこの前学園に墜落してきた奴か！！」

「え？今頃気づいたの？まあ、そうだけど」

「しかしお前のISって見たことのない感じだな。」

「まあね、まあ詳しくは追々話すよ。」

その時千冬が通信回線を通して話しかけてきた。

「それでは三人とも急降下、急停止をしてもらう。では始め！」

「それでは一夏さん、太智さん、お先に失礼いたしますわ。」

最初にセシリアが、降りて行き、見事に急停止をした。

（上手いなあ、セシリアは。俺にもできるかな？）

（噂には聞いてたけど、伊達に代表候補生やってるわけじゃないか。）

「二人とも行かないのなら先に行くわよ。」

「お、おう。」

「うっ・うん。」

続いて鈴も急降下していき、急停止した。

「よし、俺たちも行くか、じゃあ俺は先に行くぜ。」

「頑張れよ一夏。」

そうして一夏は急降下していき、急停止を、

(一夏結構スピード出てるな、すごいっ・あっ・っ)

せずに地面へ思い切り正面衝突した。

(うわあ、痛そうっ・っ)

「何をしている井上!!!早く降りて来んか!」

「は、はい!」

そう言っつて太智はスラスターを吹かして急降下していったが・・・

ピタッ

何と太智は地上15メートルのところで停止した。

「あっ・っ・っ・っ。」

「なんだその腑抜けた操縦は!お前は腰抜けか!」

「プククク・・・こ、腰抜けって、クスクス・・・」

「おい鈴、笑うなよ。」

嘲笑する鈴に対して一夏が釘を刺す。

「はあ・・・まあいい、お前は放課後に訓練でもしておけ。」

「分かりました。」

こうしてISの実習は終わった。

放課後 一組にて。

「あはははっ！！腰抜けだって！あはは！」

「わ、笑うな！」

「太智さん、チキンという言葉を知っていますか？あ、でも食べ物の方ではありませんよ。クスクスッ。」

「お前ら、いい加減にしろよ。誰にだって苦手なことくらいあるだろ。」

「そつだ、誰にだつて得手不得手がある。」

「い、一夏、篤……。」

「でも、15メートルも手前で止まることなんてあるの？フフツ・・
やば、ツボツたつっ・・ククツ・・。」

「お前ら、そんなに俺が腰抜けに見えるなら模擬戦をしようじゃないか!!」

「フフン・・いいわよ。ハンデはどうする？ビビりさん？」

「そんなものはいらねえ、二人まとめてかかって来い！」

「あら、ずいぶんとなめられたものですわね。私たちは代表候補生
ですよ。本当にそれでよろしくて？」

「おい太智・・それは止めといた方がいいんじゃないかねえか？」

「いや、こいつらには一泡吹かせてやる！」

「ほう、威勢だけはいいようだな井上。」

一体どこから湧いてきたのか一夏の背後に千冬と二組の担任が立
っていた。

「うわあつ出たあ!!」

「人を化け物のように言うな。」

バシッ！！

このタイミングでの一夏への出席簿アタック。

その時うつろにいた二組の担任が太智に一つのキーを渡した。

「井上君、あなたの部屋が決まったわ。そこの織斑君と相部屋よ。これキーね。」

それだけ言うと、担任の先生は教室を出て行った。

「話を戻すが、お前ら模擬戦をするのだな？」

「はい、そうですけど。」

「よし、では来週の月曜日の放課後、第三アリーナで織斑と井上、オルコットと凰の二対二で模擬戦をしてもらおう。」

「ええっ！？なんで俺まで！！？」

「さすがに二対一で勝てるわけがないだろう。異論はないな？では解散。」

そう言って千冬は教室を出て行った。

「太智、とりあえず帰ろう。ほら二人も。」

「え、ええ。」

「なんだかきつかけが自分たちとはいえ、あまりにも唐突に決まっ

てしまいましたわ……。」

「そ、そうね。」

その後五人も教室をそそくさと出て行った。

因みに太智は寮に帰る途中でテニスコートに寄り、ソフトテニス部に入部届を出した。

第三話 挑戦状（後書き）

太智のISスーツはエヴァのプラグスーツをイメージしてるんですが、またすぐに新しいスーツに変わります・・・
後太智のISはSEED初期のGAT Xナンバーシリーズの機体をイメージしてます。

オリジナルIS設定（前書き）

一応現時点での時系列は一卷の無人機事件の手前です。

オリジナルIS設定

クリーヴ
CREAVE

操縦者 井上太智

機体解説

中近距離兼強襲用IS。機体コンセプトは高速戦闘及び基地や施設の破壊を目的に開発されている。また、設計段階から太智が操縦するためと想定され、機体自体の構造がほかのISと根本的に違う。外見においては全身装甲で、顔まで覆われており、頭部はデュアルアイセンサーとV字型アンテナが設置されている。こうした理由は、外部の組織に素性を知られないためと、絶対防御が発動しなかった時のための安全策である。機体のカラーリングは緑と白を基調としている。

大きな特徴は、他のISには搭載されていないフェイスシフト（PS）装甲と、新型OS「General Unilateral Neuro-Link Dispersive Autonomic Maneuver Synthesis System」（ジェネラル・ユニラテラル・ニューロリンク・ディスプレイ・オートノミック・マニューバー・シンセシス・システム）である。このPS装甲においては、実弾及び物質による攻撃は一切無効化する。しかし、この特殊装甲は常にエネルギーを消費するため、長時間の

運用やエネルギー系統の兵器との同時使用は本機のエネルギーを著しく消費させる。また、エネルギー兵器に対しては限定的な防御力しか示さず。完全とは言えない。

そしてこの機体の最大の欠点は、他のISはシールドエネルギー、稼働用エネルギーが個別にあるのに対し、この機体はエネルギー機関が一つしか無く、エネルギー管制が単純化されている。つまり、ビーム兵器やスラスタを長時間使用すればエネルギー切れを起し行動不能となり、ISの試合や戦闘においても敗北が決定する。

この原因は、搭乗する太智が女でないのが関係している。異例の一夏とは違い、太智は無理やりISに乗っているため通常のISでは最低限の稼働すらままならない。実際、以前に量産型の打鉄に乗ったときは絶対防御が発動せず、さらにPICがうまく作動しないせいで事故が発生し太智は重傷となった。

なおこの機体はエネルギーが規定値より減少するとPS装甲が解除され、フェイズシフトダウンという現象を起こす。この状況に陥ると、絶対防御が作動しなくなり操縦者の生命の危険に繋がるため、事実上こうなると、単機での行動はほぼ不可能となる。また、本機にはPICがないため飛行時に発生するGが打ち消されない。宇宙空間や高高度による稼働時の時に内部の気圧操作や酸素供給などもすべて従来の戦闘機や宇宙船とほぼ同じ仕様であり、本機が全身装甲なのはそのためもある。装甲のどこか一部でも破壊され穴が開くと本機の性能上、高速飛行や宇宙空間での稼働は不可能となる。それにバリアーシールドもないため、基本的に被弾、特にビーム兵器の直撃は致命的となる。

本機の武装が豊富なのは、操縦者保護能力の低さをカバーするためでもある。

武装

5mm小型衝撃機関砲 ドワーフアタック
両側頭部に2門設置された小型機関砲。

構造は鈴の操縦する甲龍の衝撃砲とほぼ同じもので、設計データを元に改造された。

「ドワーフアタック」とは英語で「小人の進撃」の意。

8mm高エネルギービームライフル

非使用時は右腰のウェポンラックにマウントされる。主に中距離での戦闘に使用される。威力はブルー・ティアーズのビットよりも低い、それでも十分な威力を誇る。ただ拳のコネクターを介して銃身に直接エネルギーを直接供給してるため、発射数に反比例して稼働時間が低下する。

攻盾複合型対ビームシールド ニードルウォール

非使用時は左腰のウェポンラックにマウントされる。

内部には大型ビーム発生装置がついておりそれにより大型ビームサーベルを形成する。

「ニードルウォール」は英語で「針付きの壁」

大型ビームサーベル

ニードルウォール中心部に設置された大型ビームサーベル。出力は高いがエネルギー消費が激しいため長時間の使用は好まれない。

高出力ロングビームサーベル ケーン

非使用時は、後腰ラックにマウントされる。その名の通り、刀身が細長く形成され、高い収束率を誇り、その分威力も上がっている。大型ビームサーベルと同様にエネルギー消費も激しいため、長時間の使用は禁物である。戦艦や施設破壊が主な使用目的である。

また、基本構造が通常のビームサーベルと違い、ビームライフルに似せて設計されているので根本的に構造が違い、他のビームサーベルはピンク色に発光するがこの装備はグリーンに発光する。

最大の特徴は試験的に導入された連結機能であり、二本の柄を合体させ、スピアーとして使用できる。

「ケーン」とは「杖」の意。

ビームサーベル

両腕の側腕部に設置されているビームサーベル。

本機のほかのビームサーベルより出力が抑えられてるため、通常のIS相手などには本武装を使用する。腕部に設置されてるため抜刀動作を一切しないのでタイムラグがほとんどない。

また、前方から後方へ回転し、トンファアの様にも使える。

大型ワイヤービームアンカー ホウエール

本機の最大の特徴ともいえる武装。背部ユニットに4基設置されている。アンカーの周囲フレームにビーム発生装置が付いており、これによりビーム刃を展開して、攻撃する。

非使用時はたたまれていたが、飛行時や使用時にはXの字のシルエットの様に展開する。また、内蔵されたブラスターにより軌道を変更し、目標を追尾することができる。

「ホウエール」とは「鯨」の意。

オリジナルIS設定（後書き）

もう少しペースアップして書きたいと思います。試験二週間前なので少し更新が遅くなるかも・・・
チームサーベルはイージスのものをモデルにしました。

第四話 週末の特訓（前書き）

最近金がない・・・バイトでもしようかな・・・

第四話 週末の特訓

「なあ井上、隣いい？」

早朝、太智が寮の食堂で一人で食事をしていたところ、一人の少女が話しかけてきた。

「もちろんいいよ、えっと・・・大山さん、だつたっけ？」

その少女は太智と同じクラスの大山夏海なつみという少女だった。彼女は太智と同じ京都生まれの京都市育ちで、太智が転校してきた日から少なからず彼に興味を抱いていた。もちろん太智とは違いバリバリの関西弁で、顔の中心部にあるそばかすが印象的だ。

「もう、前も話しかけたんやしええ加減名前覚えてーな。」

そしてこの少女の性格は鈴と同じで結構勝気であり。少し鈴と似通ったところがある。

「ごめん、なかなか覚えられなくて。」

「ホンマ頼むでー。ていうか井上って朝ごはんウチとおんなじ量やんっ！なんか女々しいな・・・気持ち悪っ。」

(朝ごはんの量が一般女子と同じ量ってだけでそこまでいうか？)

「それは言い過ぎなんじゃないの？朝っぱらからそこまで言われる

ときついでよ。」

「しかもウチと同じ京都生まれ京都育ちのくせになんで標準語やねんっ、ウザッ・・・」

(もう死のうかな・・・でもなんか許せちゃうんだよね、はっ！
もしかしかして俺ってM！？)

「じゃあ俺にどうしろっていうんだよ？」

太智が不満げに言葉を投げかけると

「とりあえずかいもん付きおつてーな。今度の日曜に鈴とティナと三人で行く予定やねんけど、荷物持ちおらんかったし。」

「まあ別にいいけど・・・あ、そういえば・・・」

太智は転校初日のやり取りを思い出す。

.....

「ウインドウショッピングが好きなんだってねっ！じゃあ今度皆で行こうよー！」

「あ、でもあんまり大人数は困るな・・・」

「へえ、結構少数派なんだあ……」

「うん……だから……」

「それじゃあ……」

.....

(そういえばあの時田中さん?とも約束をしたっけな。今度誘ってあげなきゃ。)

「どづしたん?」

夏海が肩の少し下までかかった少し茶色の髪をかきあげながら尋ねてきた。

「いや、なんでも……」

「ふーん、とりあえずはOKってことでええの?」

「うん、そういっことぞ。」

「じゃあ今度の日曜朝10時に校門前集合な。じゃ、お先。」

そういって彼女はパン一枚とサラダに少々のおかず&リンゴジュースを完食し、先に教室へ行った。

「俺も早く食べないと……」

そのあとを追うように太智も食堂を出た。

放課後 第三アリーナにて

「んで今日は来週の模擬戦に向けて太智とこうして練習をしてるわけだが、なんで相手側のお前らまでいるんだ？」

「べ、別に！ただあんたらが相手だと一方的で模擬戦にならないから、少しはまともな戦いになるように鍛えてあげるって言うてんのよー！」

「そ、そうですねっ！この前の一夏さんとの試合のように一方的ではギャラリーの方々もがっかりするでしょうし、わたくしたちが見てあげますわっ！」

「そうかそうか、それならありがたい。じゃあ早速ご教授願います。つて、なんで箒までいるんだー？」

一夏はピットの方を見やり声を投げかけると、箒はアリーナのピットで仁王立ちでドッシリと構えていた。「ドーン」という効果音が聞こえそうだ。

「うるさい！私がどこで何をしようと私の勝手だ！」

「さいですか・・・」

「とりあえずアンタ達二人で一回模擬戦しなさいよ。二人がどんな感じの動きか一回把握しておきたいから。」

「そうですね、一夏さんは以前お見受けしましたが、太智さんの戦闘スタイルを一度見てみたいですね。」

「分かった。じゃあ太智、ISを起動させて・・・っと、もうしてあるんだな。じゃあお互いに距離を取ろう。」

「うん。」

太智は短く返事をして少し離れた位置まで飛んだ。

「いいよー!!」

「よし、じゃあ始めるか、二人ともピットまで戻ってくれ。」

「言われなくても分かってるわよ。」

「開始の合図はわたくしたちが致しますわ。箒さん、あなたも。」

「え?ああ。」

そう言って二人はピットに戻り、箒とともに大きく息を吸い込んで・・・

「」「」「始めっつ!!!!」「」「」

その瞬間、一夏は雪片式型を構えて一気に突っ込んできた。

(うおっ速!!)

太智は咄嗟にシールドを構えた。

ガッキイイイイイイン!!!!

(データでも知ってたけど、白式・・・なんて機動力なんだ・・・
!!一撃が重いつ!!)

「くっ・・・!!」

太智は頭部の衝撃機関砲をゼロ距離で放った。

ドガガガガッ!!!!

「危ねえっ!!このっ!!」

一夏は負けじと回避運動をとり再び横薙ぎに斬りかかった。

「させるか!!」

対して太智は右腕のビームサーベルで迎え討つ。

ピンクの斬撃と実剣がぶつかり合う。

バチバチとそこから火花が辺りに飛び散る。

「もっつ、埒があかない!!」

太智はシールドに内蔵された大型ビームサーベルを起動させ二刀流で回転しながら切りかかってきた。

「なあっ!?!」

一夏は両手で雪片式型を構えて防御をしたが、連続攻撃のため、徐々に押されていく。

ガキガキガキンツ!!!

その瞬間太智は一気に離脱してビームサーベルをしまいビームライフルを繰り出してきた。

バシユウンバシユウン!!

「わわつと、飛び道具は相性が悪いってのに!!」

一夏は^{イグニッション・ブースト}瞬時加速を使い、一気に太智に接近した。

「うおおおおおおおおお!!!!」

一夏は太智に向かって思い斬りつけた。が、全くダメージがなかった、それどころか何か硬い壁を切りつけたような反動が手に返ってきて自身の手に鈍い痛みが走った。

「さっき昼休みに言っただろ!!!フェイズシフト装甲ってのがあるって!!」

「知ってる!!!でもここまで硬いなんて!!」

太智はエネルギー残量を確認した。

(やば、今ので結構減ってる……。このおっ!!!!)

太智は一夏をシールドで殴りつけた後、また少し離れてライフルを放ってきた。

「そう何度もくらうかよ!!」

一夏は回避を続けながら太智に近づき、袈裟切りを放つ。

「ぐおっ……。!!」

その時太智の機体のバランスが崩れ、その隙を見逃さず一夏が続けざまに斬りつけた。

ガキツガキツガキン!!!

「やっべ、エネルギーが……。くそお!!」

太智はスラスタを停止させ、斬りつけられた勢いそのまま地面に落下していき、着地した。そしてライフルとシールドを両腰のウエポンラックにマウントし、ゆっくりと後腰のロングビームサーベルを引き抜き二刀流に構えた。グリーンに発光するそれは、日が暮れかかり少し薄暗くなったアリーナに一際輝いて見えた。

(残りのエネルギーは少ないし、消耗戦になってもここは思い切りぶつかってやる……)

「来いよ一夏。」

「いいぜ太智、手加減は無しだ。」

そう言っで一夏も雪片を構え、瞬時加速で接近した。

「うおおおおおおおっっっ！！！！！！」

二人がぶつかり合う瞬間……

「はいそこまでー！！！！」

「へ？」

その場に似つかわしくない声が響き、二人は素っ頓狂な声を上げた。

「二人とも、たかが模擬戦にどこまで熱くなってるんですの？モンド・グロツソでもあるまいし。」

「そーよ、まあ一連の動きを見させてもらったけど、二人とも動きが無茶苦茶よ。一夏、あんたは突っ込み過ぎ、ちよっとは回避できるらしいけど、それでもまだまだね。」

「お、おう。」

「それに太智さんは反応が良かったですが、もう少し射撃の狙いが甘かったり、間合いの取り方が不十分でしたわ。」

「そ、そうかな？」

太智は装甲に覆われた頭を指でポリポリと掻く仕草をした。なんだかそれはとてもシユールだった。

「それに、二人とも剣技においても全然ダメだったぞ。太智はともかく、一夏、お前というやつは……」

それまで空気と化していた箒が突然喋った、そしてどこから出したのか木刀を構えて一夏に向き直った。

「わあっ待て待て箒！今はそういうのはよそうぜ。それにISを展開してるのにそれでかかってきても何にもならないぞ？」

「うるさい！口答えするな！」

「分かったから箒、それを仕舞ってくれ！」

「まあともかく、今の点を踏まえて、訓練するわよ。」

「ええ、そうしましょう。」

「それにしても太智、なんでお前の装備って常に展開されたままなんだ？」

「ああ、それは……企業秘密ってやつだ。ただ、ここにあるのが俺のISの全武装だ。詳しくはまた今度気が向いたら話すよ。」

「何だよそれ。なんかスッキリしないなあ。」

「それが世の中ってもんだよ。」

「ますます訳が分からんぞ。」

「はいはい、無駄話はそのままで。じゃあ今までの点を踏まえて明日からまた訓練をするわよ。」

「鈴さん篤さん、更衣室に参りましょう。一夏さん、また後で。」

「おう、またな。」

「俺のことはスルーかよ。」

「まあ気にすんなよ。それより太智、早くシャワー浴びようぜ。」

「そつだな。」

「ついでに今日の訓練は終わった。」

シャワールームにて

（女子サイド）

「わたくしと鈴さんがシャワーを浴びるのはわかりますが、なぜ箒さんまで？」

「あれだけ砂埃が立てば誰だって汚れるだろう！それくらい察しろ！」

「あら、それは失礼いたしましたわ。」

「っ・・・！バカにしてるのか!？」

「滅相もございませんわ。」

「ぐぬう・・・」

二人がそんなやり取りをしていると鈴は自分の胸と二人の胸を何度も交互に見ていた。

(なんでそんな二人とも胸がつかいのよ・・・一夏は、大きい方が好きなのかな?)

「あゝら鈴さん、どうしたんですの？そんなに自分の胸を見て、お気になさらないで下さいまし。まだまだ鈴さんも成長期ですもの、この先どうなるかわかりませんわ。まあ、箒さんとわたくしの胸に見惚れてしまうのはしょうがないことですねえ箒さん？」

「そ、そうだな。まあ気にするな。一夏だって胸で人を判断するような奴じゃないさ。」

「なんでそこで一夏が出てくんのよ!!べ、別に胸なんてただの脂肪の塊だし、ISの操縦に邪魔になるだけだし!!」

「負け惜しみはみつともないですわよ鈴さん？フッフ・・・」

「負け惜しみじゃないわよ！...この乳牛とメロンが！...！」

「なにおお！...？」

「」「ギヤーギヤー！...！」

（男子サイド）

・・・ギヤーギヤー！...！」

「なんか向こうが騒がしいな・・・」

「ん、なんか言ったか太智？」

「いや、なんでもない・・・」

（なに公共の場でキャットファイトしてんだあいつら・・・）

シャアアアアアアッ キュツキュツ

「よゝし、そろそろ上がるつぜ。」

「あ、おい一夏、タオル忘れてるぞ。」

「おう、サンキュ。ん？太智、なんだか顔色が悪いぞ。大丈夫か？」

「へ？い、いや、そんなことはないぞ。つつ！。つつぷ。．．．
悪い一夏っ！ちよつとトイレに行ってくる！！」

太智は素早く服を着てその場から早足で去った。

「あ、ああ。．．．？」

「うぐつ。．．．おえええええつつ！！。．．．はあっはあっ。．．．
ゲフツ。．．．。」

太智は近くのトイレに駆け込み胃の中のものを吐き出した。

（くつ、まだISとの稼働が上手く行っていないのか。．．．それに、
高速戦闘の際にかかるGにもそろそろ慣れないと。．．．こんな感じが
きりがないぞ。）

その時、太智は自分が置かれている状況に初めて気が付く。

（あつ、そういえばここは女子トイレじゃないか。．．．って、IS
学園だからほぼ女子トイレしかないのは当たり前か。．．．さて、
ばれないうちにさっさと戻るか。）

ガチャ キュツ ジャアー キュツキュツ

「ふう。」

「あれ？井上君？」

「え？」

そこにいたのは見知らぬ生徒だった。恐らくタイの色からして上級生だということが分かる。

「なんで俺の名前を？」

「そりゃあ、たった二人しかいない男子生徒だからね。なんか顔色が悪いけど大丈夫？」

グイツと上級生が太智に詰め寄った。

「だ、大丈夫です！！それじゃっ！」

「ああ〜行っちゃったあ。」

一夏・太智部屋

ガチャ

「ふう、ただいま。」

「お、お帰り太智。今から晩飯食いに行くんだけど一緒に行かねえか？」

「ああ、そうだな。」

夜 食堂にて

一夏はカレーライス小を注文し、対して太智はあっさりとした雑炊をちゅうもんした。

「やっぱり一夏は夜は少なめに取るんだな。」

「太智だって似たようなもんだろ。」

「いや、俺は今日のはあんまりお腹が減ってないんだよ。普段はたくさん食べるんだけど。」

「そうか。」

すると向こうから三人組がやってきた。

「あつ！いたいた一夏。あと太智も。」

「こんばんは織斑君。井上君。」

「あんたまたこんなあつさり系食べとんの？どんだけ小食やねん。」

二組の鈴とティナと夏海の三人であった。

「今日はたまたまお腹が減ってなかったただけだ！」

それに割って入るように鈴が顔を赤くしながら一夏に言った。

「それはそうと一夏、あ、あんたこ、今度の日曜日開いてない？なつちゃんとティナの三人で買い物に行きたいんだけど・・・さ。荷物持ちがないから困ってるん・・・だよな。ダメ・・・かな？」

「あゝ悪い、その日は白式のデータ取りに行かなきゃならないんだ。」

「そ・・・そう・・・。な、なによ！そうなら最初からそう言いなさいよ！馬鹿！！！」

「いや、だからそう言ってる・・・。」

「も、もういいわよ。また今度誘うからっ！」

「ああ、そうしてくれ。」

「あ、そうそう鈴、その件についてやねんけど、井上も来るようになったから。」

「え？なんでそうなのよ！？」

「だって鈴荷物持ちがおらんって言うってたやん。だからウチが井上を誘ったんやけど・・・マズかった？」

「え・・・いやいやそんなことないわよ！むしろ大歓迎だから！」

「そっか、ならよかった。」

「二人とも、そろそろご飯食べない？もう私お腹ペコペコなんだけど。」

ティナがその場を制すように言い、お腹をさすってアピールをする。

「あ、ごめんねティナ。・・・そっだ、ねえ一夏、一緒に晩御飯食べてもいい？」

「ああ、別にいいけど・・・そっいやセシリアと箒は？」

「あの二人はもうとつくに済ませちゃってるわよ。二人とも一夏があまりにも遅いから先に食べるって怒ってたわよ。」

「そうか、後で謝らないとな。って、なにやってるんだ皆、早く注文して来いよ。先に食べちまうぞ。」

「わ、わかってるわよ。二人とも、行きましょ。」

「うん。」

「へーい。」

こうして五人は夕食を済ませ、部屋に戻り就寝した。

第四話 週末の特訓（後書き）

更新遅れてすいません！

試験が迫ってるので次回はさらに遅くなるかもしれませんが、ご了承ください

承ください・・・

ほんとすいません・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4188y/>

IS インフィニットストラトス invisibility menaces 見えざる脅威

2011年11月28日01時50分発行